

北総の里

発行日 2013. 10. 7
 第 224 号
 (第 1 回発行)
 1974年 4月 1日
 発行所 北総育成園
 千葉県香取郡東庄町
 笹川い5852
 ☎ 0478-86-3003
 FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが
 新しくなりました!

施設の概要や理念、利用者の様子、
 園長からのお知らせ等、盛りたくさん!
 ぜひアクセスしてみてください。

ホームページアドレス
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp



▶住み慣れた40年の垢の染み込んだ本館建屋
 ともお別れた。猛暑を乗り越えた朝顔が花
 を添えてくれた。H25・9・11



特集

古い上着よ

さようなら…

当園は知的障害者支援施設。定員75名。この地にお世話になって40年。昭和49(1974)年開園当時と、今を単純に比較することは出来ませぬ。今とは福祉への理解も予算規模も小さなもの。どう、この道を切り拓くかの試行錯誤の時代。が、多くの理想を寝ずに語れた幸せな時代だった気がします。8畳の4人部屋13室≒50人。その佇まいはこの地の緑に呑まれて儚いものでした。その後の歩みは遅々として、嬉しいこと、悲しいこと、涙したこと。多くの皆様のご厚情でここまで辿り着き

ました。

さて、現在当園では船橋市事業として園舎建替え、改修工事がすすめられていきます。この工事は利用者を別な場所に移しての工事ではなく、本館に利用者が暮らすその隣に工事現場があるという、かなり窮屈な難工事。工事は一期、二期に分かれていて、一期工事(新居住棟建設)はこの3月に終了。地域の皆様には根方区の山の上に、30mのクレーンが立ち上がっていたことをご記憶の方もおられることでしょう。今までは雑居部屋での暮らしてましたが、この新棟は全て個室(56部屋)。早速、新居住棟での利用者の暮らしが始まりました。

この11月から第二期工事へ。現在住んでいる旧本館(雑居居室・厨房・食堂・事務室(コンピュータ室)他)の大改修工事が開始されます。新棟は56室。現在の利用者数は75人+短期入所5人≒80名。従って、新個室

棟に25室の二人部屋を作り、この二期工事期間を乗り切っていくことになりませぬ。

9月11日、大改修される本館前に利用者職員が勢揃い。その背後の朝顔の棚はこの9月になってもいよいよ盛んに咲き誇ってくれています。移り変わっていく人の世。「古い上着よさようなら」。大改修され面目を一新し、皆様に見て頂けるのは来年2014(26)年師走のこと。

(武井)



▶片方ではバリアフリー個室新棟の暮らしが始まった。居心地抜群。もう入所はダメなんて言わせない。H25・9・20



特集

古い上着よ

さようなら…

改めて「二輪の花」の心を大切に

支援課長 絵鳩 典子

9月4日(水)、慣れ親しんだ旧棟の居室を離れ新居住棟への引っ越しが行われました。

今年度4月に新居住棟が完成してから、いつかはこの日を迎える事はわかっていましたが、やはり殆どの荷物が運び出され人気のない古い館内を見ると、一抹の寂しさを感じます。しかし、高齢化が顕著になり介護度が高まった利用者が大部分を占めるようになった今、より使いやすい設備が整った新居住棟は利用者のみならず職員にとっても念願の建物であり、これからの生活に寄せる期待も大きいものです。

旧棟の大改修を控えたこの時期、その在りし日の姿を記録に留めておくことが職員の大きな仕事となりました。取り壊される建物そのものの写真はもちろんのこと、利用者の皆が夕方作業から戻り、各居室でホッと一息つく姿、職員に手伝ってもらいながら衣類をロッカーにしまう様子、利用者同士楽

しそうに過ごす笑顔、そしてそんな部屋には職員手作りの暖簾とさりげなく一輪の花が飾られている。このページの上部にそんな写真の一部を掲載しました。

北総育成園の開所は昭和49年。開所当時5名だった利用者もその後増えていき昭和の時代は定員50名。昭和63年、船橋市が増員・増築工事に着手し平成元年に工事完了。定員も20名増え75名となりました。75名の暮らしは大所帯。個室は僅かばかりで、ほとんどが3人部屋のいわゆる「雑居生活」。居室の間取りも決してゆとりがあるものではありませんが、「施設だからこそ夢のある温かみのある暮らし」を整えることは開所当時から大切に取り組んできました。その実践としてまず挙げられるのが「一輪の花」。花屋で買った豪華な花でなくとも、野に咲く季節の花を一輪摘んで、居室の入口にさりげなく飾ることは、景観的に良いという事だけでなく、この人達に寄り添って生きる職員の心の姿勢を表す行為として日々大切に受け継がれている北総精神です。武井園長は我々職員にこうメッセージします。「この人たちは切り花に似ている。毎日新鮮な水が与えられ、手をかければ花は長持ちして生き生きと咲く事ができる。しかし、水



が換えられず手も入らなければたちまち花は枯れる。この人たちも同じ事。職員の心のこもった声掛けや細やかな目配りで、心が救われ笑顔の花が咲く。我々職員はこの「一輪の花」の実践を通して「よし、今日も一日良い仕事をするぞ」と姿勢を整える機会をもらい、言葉を持って自分の不如意を訴える事ができないこの人たちに謙虚に寄り添う心を育ててもらっているのだと思います。そして利用者への直接的な支援の指針になっているのが「相手の顔を立てる・立つ瀬を残す・折り合いをつける」「惻隠の情」。「雑居生活」は大勢での暮らし。どうしても相性が合わない人もいるし、他生への悪口が絶えない人もいます。それを職員が「仲良くしないとだめだよ」と通り一遍で済ませてしまった時、利用者はきつと失望を感じると思いますが。しかし、それを言葉に出して訴えることができる人はいません。その事に我々はどれだけ危機感を持っているのでしょうか。我々は勤務時間が終われば利用者から離れます。しかし、24時間施設で暮らす利用者はそうはいきません。嫌な事も全て引き受けなければなりません。そんな時適切に間に入ってくれる職員の存在がどれだけ大切か。その時すぐに万事解決!

はいかなくても「職員がきちんと耳を傾けてくれた」という実感をもってもらえる事が大切だと思います。それがあからこそ大勢での雑居生活でも甘んじて引き受けてくれるのだと思います。そしてこの「雑居生活」を通してお互い助け合ったり、相手を思いやる豊かな心が育まれてきました。特に高齢化となり、介護度が顕著になった利用者が増えた近年、この利用者の助け合いの姿勢には、うんと助けられました。もちろんその根底には「働くこと生きること」があることも忘れてはなりません。「大人として生きる」ことは「働くこと」。それを手に入れたこの人たちは無限の可能性を秘めています。さて、新居住棟に生活の基盤が移った今、改めて北総が大切に育んできたこの「一輪の花」「相手の顔を立てる・立つ瀬を残す・折り合いをつける」「惻隠の情」をもう一度職員一人一人の姿勢として捉え、細やかな支援を展開していく事の重要性を実感しています。いくら建物や立派でも、その中身が通っていないければ意味がありません。「人は石垣、人は城」。武井園長が良く我々にメッセージしてくれる言葉です。この言葉を誇りに思い、新しい日々も丁寧に重ねていきたいと思えます。(了)

長崎普賢学園 研修報告

H25.8.7
〜
8.9

今夏も、4名の職員が園を代表して、長崎の姉である普賢学園へ夏季研修に伺いました。様々な作業所の見学他にも、お忙しい中職員の方々と交流の場も設けて下さり、姉の懐の深いおもてなしにはいつも感謝しております。研修に参加した職員の記事を掲載致します。

①長崎普賢学園を訪問して

副園長 白樫 久子

残暑厳しい毎日が続きます。本田利峰先生はじめ、普賢学園の利用者職員の皆様にはお元気でお過ごしのことと存じます。千葉では、朝夕いくぶん過ごしやすい風を感じるようにはなりましたが、日中はまだまだ猛暑が続いております。北総の利用者職員一同は、おかげ様で皆元気に過ごしております。

さて、この度8/7〜8と大変お忙しい中、私達四名の研修をお引き受け下さり誠にありがとうございます。利一郎先生には長崎空港へのお出迎えから、各事業所へのご案内、そして心づくしのおもてなしを頂戴し、本当にありがとうございます。また受け入れ担当の林田先生には車の運転から様々な細やかな御配慮を頂きました。夜の論所原でのバーベキュー、広大で豊かな緑の中でとても

楽しい時間を過ごすことができました。横田先生、出野先生、北岡先生他皆様とのなごやかな時間は瞬く間に過ぎてしまいました。作業のこと、利用者さんの支援のこと、色々と教えて頂きありがとうございます。私自身、平成十二年の交流会以来の訪問でしたが、改めて普賢学園さんの懐の深い事業の数々に感動し、大きな勉強をさせて頂きました。

利一郎先生から各事業の説明の中で、その理由や経緯を伺い、その事業に関わる利用者、保護者、職員、関係者各位のそれぞれの思いがひしひしと伝わって参りました。今回お会いした職員の皆さんの明るく前向きな笑顔がとても心に残っております。



▲普賢学園の若きホープ本田利一郎さんを真中に。遙かに普賢岳の雄姿。H25.8.8

対馬馬の小屋の前に、大根葉の干し場が倒れそうになりながらも、普賢学園さんの歴史を静かに語るように立っていました。利峰先生が、この干し場を源流として大切にされていることをお聞きしました。我々の今の仕事も全て先人諸先輩方の思いの源流の流れにあるということ、今一度心において、これからの仕事に全力でしかし謙虚に進んで参りたいと深く思いました。

同行した三名の職員も、多くのことを学ばせて頂いたと感激しております。きつとこれからの仕事に具体的に生かしてくれるものと思えます。皆様、大変貴重な研修をさせて頂きまして、本当にありがとうございます。

またいろいろとお土産も送って頂きありがとうございます。そしてこれからも我々の姉妹の絆と深い友情が続きますことを心より祈念いたします。御礼とさせて頂きます。まだまだ暑さが続くようです。皆様どうぞお体を大切に、ますますの御活躍をお祈り致します。誠にありがとうございます。

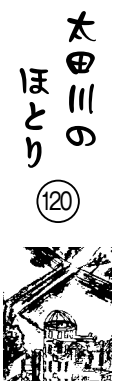
普賢学園園長

本田 利峰 先生

北総育成園

白樫 久子

平成二十五年八月二十一日



長崎平和式典に参加して

支援員 石橋 琴美

長崎に行くのは今回が初めて。ニュースで流れる平和式典を見たことはあったが、まさか自分が参加できるとは思ってもみなかったので、とても良い機会を頂いた。

平和式典当日の朝はホテルから路面電車に乗り長崎駅へ。周りには千羽鶴を持った方があちこちにいた。北総からも皆の願いがこもった千羽鶴を持ち、平和公園へと向かった。

平和式典の会場はたくさんのお客様、参列者、報道陣、そしてすでに奉納された千羽鶴で埋め尽くされていた。私たちも無事に千羽鶴を奉納し、爆心地へと向かった。目の前には、黒い塔の周りに緑と人がたくさんいる今の爆心地。そして、近くには砂と瓦礫の中にポツンとある昔の爆心地の写真があった。周りの景色を比べると今は回復しているように見えるが、被爆者の心の傷は消えない。昔の爆心地の景色を目に焼き付け、平和を願う。

次に原爆資料館へ向かった。中で

② 地域における福祉施設の役割

支援主任 青野 豊市

普賢学園ではゴルフの打ちっぱなし練習場とカラオケボックスの経営もしている。

ゴルフの練習場もカラオケボックスも元は一般の業者が経営していたが経営難に陥り、普賢学園に経営をしてもらえないか依頼があり、現在は就労継続B型の事業として経営をしている。実際にお客さんの入りや設備を見学させて頂くと、街中にあるようなものと全く変わりなく、スタッフの対応を見ても福祉施設が経営している雰囲気はない。利用者の仕事としては玉拾いが主であるということだ。今回、このゴルフの練習場やカラオケボックスを見学させて頂き、私の中で地域における福祉施設の役割の認識が広



▲法人が経営する墓地。身寄りのないこの人たちも眠る。普賢岳を仰ぐ。H25.8.8

がった気がした。また、普賢学園では身寄りのない利用者の為に霊園もある。普賢岳と海を一望できる高台に位置し、学園で働くことに身を置き人生を一生懸命生きた利用者の方が、仲間と一緒に最後に休む場所。普賢学園を

有する社会福祉法人山陰会では保育園も経営しており、本場に「ゆりかごから墓場まで」を実践している法人である。今回社会福祉法人山陰会普賢学園を見学させていただき、私自身が抱いていた福祉施設が果たす地域社会への役割の意味が良い意味で変わったような気がします。今後の仕事に活かせるように視野を広げ取り組んでいきたいと思えます。

③ 礎を築いた干場

支援員 田仲 宏臣

8月7日～9日にかけて、長崎県島原市にある普賢学園へ研修に出させて頂きました。私自身初めてとなる長崎研修で、出発前は期待と不安で胸がいっぱいでした。現地に着くと、利一郎先生をはじめとする職員の皆さん、利用者の皆さんが温かく迎えて下さいました。2日間ではとても見学しきれない程の事業所を無理を言っただけで頂きましたが、中でも特に印象的だったのは、古びた



▲普賢学園の原点とも言える汗と涙の大根葉の干場。源流を大切に思う心があって今がある。

切り干し大根の干場を見せてもらったことです。その際に、利一郎先生がおっしゃった、「先人たちが築いてきたものの上に、今の自分達が立っている事を忘れてはいけない。どれだけボロボロになっても、自然倒壊するまで、この普賢学園の礎を築いた干場なので、取り壊さないのです。」という言葉です。丁度北総でも新棟の改修工事が始まるところで何か重なり、時代を築いてきた先輩方がいて、今の自分の仕事、居場所があるのだという事を改めて思いました。行く先々で出会った、利用者、職員の皆さんにも、大変良くして頂き感謝の気持ちで一杯です。この研修を通して学んだことを今後の仕事に活かしていければと思います。ありがとうございました。



▲平和祈念式典当日 AM8:30、北総の皆が折った千羽鶴を届けることができた。H25.8.9

も印象に残っているのが、実際に触ることのできた栈橋のプレート。爆発の熱でぐにやりと折れ曲がった、厚さ2センチの鉄のプレートはその爆発・熱の強さを物語っていた。もしも原爆が投下された時、この橋の近くにいたら…と考えると本当に恐ろしくなった。また資料館では写真がたくさんあり、話を聞くだけでは伝わらない本当の恐ろしさを感じた。「たぐさんの人が亡くなった」と一まとめにしてしまえばそこで終わりだが、そのたぐさんの人の中には、大人も子供も家族も友達もいるということ。その人の立場になって考えた時、胸が張り裂けそうになるほど、心が痛んだ。心より亡くなった方のご冥福をお祈りいたします。(了)

街道をゆく 122

常一さんの五島に立てた幸せ。

武井 敏朗

宮本常一の歩いた日本、その足跡は彼の膨大な著作集に書き留められている。彼が亡くなったのは1982(昭和57)年のこと(享年72才)。既に30年の歳月が流れた。民俗学者、宮本常一の再評価がなされ、彼を敬愛して止まぬ後塵は彼の歩いた日本の山巒、孤立した島々をそのまま歩くことを試みたい衝動に駆られる。筆者は東京時代、憧れをもって遠くから常一さんの姿と声を聞いたことがある。私の心のお師匠さんだ。著作集4(未来社刊)は「日本の離島」。その書き出し「島に生きる」はこう始まる。

《小さな島での暮らし》「長崎県五島列島福江島の北側に姫島という小さな島がある。家は十五、六戸もある。うか。その中学生の書いた作文がいつまでも私の頭からはなれない。【島には小中学校合併の小さな学校があり、二十人に足りない生徒がいる。子供達のためのしめは野球だが、運動場がせまく、また海が近いので、バットは左手に持ち、玉が遠くへ飛ばないようにする。もしボールが海に落ちるとアウトという事

なる。海をめぐらす小さな島の生活は単調で、しかも父や母たちは急傾斜の狭い畑を朝から晩まで耕して他に何の望みもない。たまに沖を大きい船のゆく事があり、こどもたちはそれをいつまでも見つめているが、そういう船はこの島に寄つてくれることはない。どこからきてどこへいくのか。その船に託す夢もない。自分は大きくなつたらいつたい何をしたい理由はなんだろう。そのはじめ島に理想の世界を打ち立てようとした者は少なかった。大ていは止まない実情によるものだった。五島の周辺の島々は無人島であるものが多かった。今から300年あまりまえ、日本ではポルトガルやスペインからわたってきたカトリックのバレード(神父)たちの熱心な布教によつて切支丹の目ざましい普及が見られた。それが禁制にあり、その弾



▲H25.7.8 AM11:00. 奈留島江上教会。屋根の合わせに十字が彫つてある。その時間、日に照らされて壁にも十字。その間に立ち合った。神のご加護が

圧に抗して島原の乱となる。その乱後、ひっそりと古い信仰を持ちつづけた人々は、密かに五島にわたつて、荒野、小さな属島に住み、その辺地を開拓。その信仰を守るには小さな島や狭い岬角が都合が良かったのである。常一さんの話は以後、延々と続く。その筆の運びは名もなくその地で朽ちていくことを余儀なくされた人々の一人一人を氣遣つているかのようで厳しく暖かい。

今から10年前、常一さんの生まれ所在である山口県周防大島を歩いたことがある。常一さんの家は直接は海に面していないが、道一本隔てた、小さな町の中。案外大きな島で海の反対側は棚田であった。

今年、5月7日(月)、図らずもその常一さんが書き留めていた「五島」に行けることになった。この日朝一番、成田空港から福岡空港。そして小さなプロペラ機に乗り換えて、五島福江島へ。福江は石田家5万石の城下町。街の中心に立派な城跡が残っていた。生活支援施設・五島育成園を見学。いかにも島の子らしい、純朴そうな利用者。施設長さんが五島列島、島であることの障害者福祉の大変さを語ってくれた。

午後は映画「悪人」のロケ地になった大瀬崎へ。大瀬崎灯台は断崖絶壁を一方的に一時間以上下った絶景の中。半端ではなかった。福江島



▲H25.5.7PM. 映画「悪人」のロケ地、大瀬崎灯台に立つ。

は入り組んだ入江を抱える。常一さんの記録に詳しい玉之浦は大瀬崎からさらにその入江の先だ。そこは小さな港町。船溜の前に小さな教会。昭和の当初までは長崎と肩を並べるほど繁盛した漁業基地であつたらしい。裏通りを通り抜けた。昔は料亭であつた面影の格子戸の家が数件目に入る。往時の賑わいはどんなだつたんだろう。明けて8日(火)、五島福江島から数えて二つ目の奈留島に行くことが出来た。この旅の企画者である勉さんはどうでもいい観光旅行を毛嫌いする。思いも寄らぬ大胆な道行きが待っている。この奈留島に滞在した5時間。どんなことがあつても辿り着けないと思つていた島を歩いて幸せ。タクシーのおぼさんが帰りの私たちの船が見えなくなるまで手を振ってくれていた。 「※偉大な民俗学者を常一さんなんて失礼な呼び方してお許し下さい」

夏期研修報告

大自然の中で学ぶ命の尊さ

支援員 三浦 圭織

今年の夏期研修は富津市にある「マザー牧場」に行ってきました。マザー牧場は幼少期の頃、よく親に連れて行ってもらったようですがあまり記憶がなく、幼少期の頃と大人になつてからは楽しみ方や視点が違うのではと思います、また動物が好きで触れ合ってみたり癒されたり出来たらなと思いました。



▲馬に癒される三浦さん。そう言えば来年の干支は「午」。

実際にマザー牧場に行ってみて様々な動物たちと触れ合ったり、広大な敷地で思いっきり体を動かし、一面に広がる綺麗なサルビアの花を眺め癒され、命というものを身近に感じる事が出来ました。園長がいつもおっしゃっている、「動物、生きものを大切にすることは、この人たちが大切にすることに繋がる」というように、どんな花にも動物にもそ

れぞれ命があり、命あるものを大切にすることを忘れてはいけないと、今回マザー牧場に行き強く思いました。利用者も同じように、どんなに障害が重くても皆同じ人間であり、一日

一日を精一杯生きていくということに心を留めながら、これからも支援員としてこの人たちとかかわっていきたく思いました。また、動物たちと触れ合ってみて様々なことを考えさせられました。自分はなぜ施設で働こうと思ったのか、なぜ障害というものについて学びたいと思ったのか、マザー牧場という大自然の中で、段々と薄れていく初心の気持ちを思い出すことが出来ました。

生きものの、動物と触れ合うことで、なんだか人に優しくしようという気持ちが生じた気がします。

生きものを大切にする、利用者一人ひとりの気持ちや立場になって考えてみる、このことを常に頭に入れ、今後も良い支援をしていきたいと思えました。

あちこちと迷ってようやく我が部屋に

加瀬 裕一

村議会だより

110

今年の第41期の村議員選挙で26年ぶりという四半世紀の時を経て当選した田久保さん。北総開所の49年に入所。農耕班の藉は40年の大ベテラン。管理機の操作ができる田久保さんは、農耕班にとつてなくてはならない存在。昭和の時代に5期、議員を務めていたことがある。そして今回26年ぶりの出馬にいたつたのは何があつたか。言葉がない田久保さんから真相を聞く事はできない。それでも日々村議員としての自覚が

垣間見える。現在は新棟も完成し、既存棟の改修工事も視野に入り、生活する環境も変わった。特に食後の掃除においては、言われてから動く村議員もいる中で明らかに意識して取り組む田久保さんの姿がある。村議会や全体会議といった場でどうしても発言できる人が目立ってしまうが、その場で田久保さんの存在がすすむ事はない。それには田久保さんがんばりをみんなに伝える職員が存在が重要。これからもしっかりとバツクアップして田久保さんがんばりをアピールしていきたい。(菅谷)

みんなの広場

①新棟での初夜勤

現在9月16日零時37分、新棟に移つてからの初夜勤。私は風寮、林寮、山寮を見わたせる所でこの原稿を書かせてもらっている。新棟に移つてから12日目となり、少し慣れてきたのか利用者の方々は皆、良く眠っていて秋の虫達の鳴き声が新棟の廊下に鳴り響いている。



(杉本)

②新棟へ移行して

新棟へ移行してからの担当居室は風林火山の林寮となりました。林寮は重度の方が多くですが、綺麗な新棟に移つてどのように暮らしていくのか見ていましたが、過ごしやすいか以前よりも落ち着いて、皆様過ごしています。林寮の中でも特に変わったのは浜野さん。以前は就寝の時間になつても部屋に来ないで事務所の前の椅子に座っていましたが、新棟に移つてからは就寝の時間になると部屋へ行って気持ちよさそうに眠っています。

今後も利用者全員が快適な生活を送っていけるように、何年経つ



▲夕方作業を終え、個室でくつろぐ斉木さん。畳ベッドにご満悦。

でも綺麗な建物を維持していききたいと思います。(加茂)

③新棟での生活がスタート
 新棟での生活が始まり、約一か月が過ぎようとしている。新たな関係が生まれ、段々と生活に慣れてきたように感じていたが、ある時Mさんの部屋に行くとき突然「みずでつぼうをかつてくれないか」と言ってきた。何に使うか聞いてみると「Aがうるさいからみずでつぼうでおどかせば、だまるかとおもってよ」と笑っているMさん。本気でやろうとしてのことではなく、Mさんならではのユーモアに、思わず私も笑ってしまった。でも担任として考えさせられる出来事でもあった。当たり前だが人それぞれ個性があり、いつでも100パーセント、お互いが良好な関係にあるとは限らない。新しい居住棟に移っても、日々の中

で生活する事となった武明さん。4日の引越では自分の荷物はもちろん、一夫さんや清水さんらの荷物も「おし、やるぞ!」と運んでくれました。武明さんの部屋は風林火山の山寮5で平塚さんと二人部屋。旧棟1・2室でも同部屋であり、気心知れた仲。引越して何日かは、平塚さんが自分の部屋がどこだか分からずうろたえてると、「おーい、新君、こつ

④頼りになる武明さん
 旧棟1・2室から新居室・山寮では小さな不満はもちろんあると思う。なんて集団生活の難しいことやら。それぞれの気持ちを汲み取りながら、大変さを楽しむことを忘れずに、皆と笑ったり怒ったりケンカしたりしながら、新しい暮らし、新しい人間関係を築いていけたらと思う。(信田)



▲風林火山、山寮リビング。ゆったりテレビ鑑賞。入所施設とは思えないアットホームな造りだ。

ちだよ!」と教えてくれていました。夕方や日曜日、武明さんと平塚さんの部屋を覗くと、武明さんはラジオを聞きながらおおむけになって気持ちよさそうに昼寝。その横で平塚さんはニコニコ。(猪田)

行事予定

9月4日(休)、バリアフリー新居室棟の全面的な利用が開始されました。だが、しかし、という注釈がつきます。11月から現在住んでいる本館【居住棟・食堂・厨房・事務室・コンピュータ管理室・職員室・Pルーム等】の船橋市第二期北総育成園大改修事業が始まります。従って、9月、10月はそのことへの移行期で、新棟・旧棟の使用が併用されます。①食堂②厨房は旧棟・本館を使用しています。利用者・職員の外への出入口も旧棟・本館を使用しています。風呂については女性是新棟3Fの新しい風呂。男性は旧棟の風呂を继续使用。

併用使用は10月末で終了。それ以後、工事期間一年は旧棟・本館は閉鎖。新棟に仮設厨房・職員室・事務室等を工面して、一年を乗り切ることとなります。新棟56人個室棟を短期入所も入れると約80人の利用者が暮らします。従って25室は一人部屋。中には一人は寂しいと二人部屋を喜んでる人も何人かいました。完成した暁にはこの人たちの夢の現実。質の高いゆったりとした暮らしが目に浮かびます。この事業推進の為、恒例の地域行事は休止と致します。お許し下さい。(武井)



編集後記

ようやく秋らしくなった今日この頃。先日遅番の時、利用者の堀川さんから「ほら見て!きれいだよ!」と、誘われて見上げてみれば、そこにはきらきら輝くまん丸お月様。そう、中秋の名月でした。「もうすっかり秋だね。」なんてつかの間の休息。秋は一年の中でもあつという間に過ぎてしまう気がします。そして一年の早さを思います。めまぐるしく過ぎてしまわぬよう、季節を感じていきたいと思つたひと時でした。さて、今回のテーマは「古い着よさようなら」。四十年間の思い出がたくさんつまった椎の木寮や、新棟といった居住棟を離れることでは、それぞれ様々な思いがあることでしよう。感謝の気持ちを込めて、そして「一輪の花」の心を改めて継続していくことを胸に、これからも利用者の皆さんに寄り添っていきま。みんなの広場では、新しい生活での様子を少しばかりご紹介。今回もたくさんの方の文章を寄せて頂き有り難うございました。また編集では園長、絵鳩課長、たくさんのお時間を頂き有り難うございました。(金子)